

OR全般の雑誌

本誌の“文献紹介”のページは、今年からは広範囲の雑誌に出た論文の紹介をしている。雑誌の種類は増える一方だから、それぞれがどんな性格のものか、どこから出ているのか知らないものもあろうし、ORの勉強をはじめたばかりの学生諸君には不案内のものばかりでもあろう。そこでこれから数回の予定で、かなりの偏見もまじるかもしれないが、おもなものだけでも紹介してゆく。今回は、おもな国のOR学会誌を中心に、OR全般にわたるものを、インフォーマルな座談を通じて紹介する。これに参加したのは、青沼龍雄、竹田英二、真鍋龍太郎(神戸商科大学)、寺岡義伸(姫路工業大学)の4名で、真鍋がこの記事の形にとりまとめた。

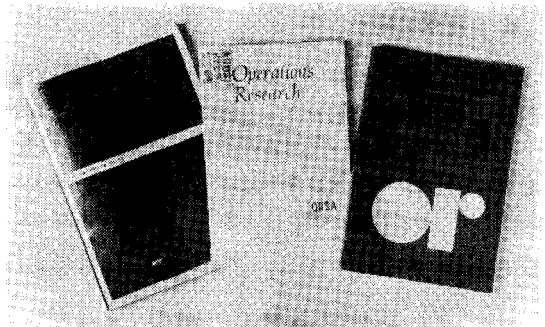
理論的な *Operations Research* 問題意識の強い *Management Science*

P: *Operations Research*(以下ORと略す)はすごく特徴がある。どちらかというと数学的ですね。ガッチリした論文が多い。Queueが多いですね。問題意識よりも数理的なほうに重点がおかれていて、問題自身がマネジメントとどう関連しているかがぼけているものもある。反面、アルゴリズムや理論はしっかりしているようだ。

R: これからは、今年から出ている *Mathematics of OR*(次回話題にする予定)にぐんと数学的なものがまわるでしょうか。*Management Science*(MSと略す)はやや変わりしましたからね。

S: それで数学が少しは減るでしょうかね。

Q: 前にどこかに書いてありましたね、ORは専門家向



きで、これに対する反発としてMSができた。

P: とにかくORにはアメリカの学会の最高の論文がのるんですね。

S: たしかにそうですね。ORSAのBulletinを見ると春秋の各大会の発表数は500以上でしょ。その中で

今回取り上げた雑誌

今回話題にする雑誌名と、発行者、発行頻度、創刊の年などをまず挙げておく、以下では雑誌名を斜体で示すことにする。

Operations Research, アメリカOR学会(ORSA), 年6回, 1952年創刊。

Management Science, The Institute of Management Sciences(TIMs), アメリカ, 年12回, 1954年。

Interfaces, TIMS・ORSA 共同, 1971年創刊。

Operational Research Quarterly, イギリスOR学会(ORS), 年4回, 1950年。

OMEGA, the International Journal of Management

Science, Pergamon Press Ltd., イギリス, 年6回, 1973年。

Zeitschrift für Operations Research, ドイツOR学会(DGOR), 年6回理論と応用の号が交互, 1956年。

Revue Française d'Automatique Informatique Recherche Operationnelle, フランス・サイバネティックス・経済・技術学会, 年12回のうち3冊がOR(表紙緑), 1967年。

INFOR, the Canadian Journal of Operational Research and Information Processing, カナダOR学会・カナダ情報処理学会, 年3回, 1963年。

Naval Research Logistics Quarterly, Office of Naval Research, アメリカ, 年4回, 1954年。

ここに出るのはわずかだから。

でも本当にORをやっている人はORの雑誌は読まない、自分がやっている分野や業界のものを読んでいたと言った人がいました。

P：方法論としてしっかりしたもの、ORを手法中心に考えた概念でまとめたという論文誌らしいですね。

S：PERTの最初の論文は1958年にこれに出たでしょ。ああいうものは全然なくなりましたね。

R：新しいアイデアよりも、拡張してどんどん出てくる論文が多くてむずかしい。それと2、3年前に字が小さくなってからは読みにくいですね。雑誌のカラーというのはみんなハッキリしてますね。ORにのるのはみんな同じようだし、これをボンと1つMSにのせたら全然ヘンになるしね。Operational Research Quarterly (ORQ)もOMEGAもそれぞれだしね。

Q：とくに最近ORとMSの差がはっきりしてきた。

S：MSはTheoryとApplicationに分けて毎月交互だったのをやめて、今年から1本にしましたね。ORSAとTIMSで出すMathematics of ORに数学的なものを回すかららしい。もうひとつ、この雑誌には論文は10ページ前後までという制限がある。

P：この雑誌の論文は問題意識がすごいですね。

S：去年までのTheoryの号でもそうむずかしくなかった。

P：MSは編集にいろんな人が加わってますね。ORとちがってビジネス・スクールの人などもいる。学会誌だけど実務の人が読んでいいと思いますね。

もっと読まれていい Interfaces

S：そういう点ではInterfacesもいいですね。

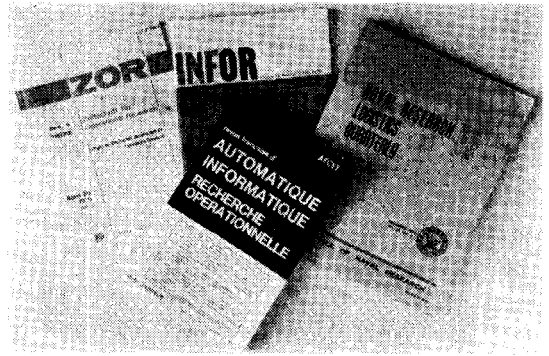
P：これはOR/MSとは何かとか、OR教育はどうしたらいいとかかを勉強するには非常にいい論文がある。

S：論文以外にもいいものがある。たとえば、トップとのインタビュー、Vaszyoni 担当の Information System in Management Science というページとか、around the model というコラムとか……。

S：経営科学、OR、システム分析とは何かとか、フィロソフィーとかコンセプトとか、そういう教養を身につけるには非常にいい。できるだけ多く読んでもらいたいし、日本語にして紹介したらいいと思います。

特集みたいにして、あるテーマで追っかけて要約のようにして出したらおもしろいね。

S：それからもうひとつ、2年前から年に1度TIMSの経営科学のPracticeという分科会が主催で、現実の結果が実行された研究の論文のコンテストがあって、その入選者の8篇ほどの別冊が出る。実際に行なわれてい



ることが条件ですから、つまらない簡単な手法でも大切なことが書かれている。

R：知らなかったなあ、こんな雑誌。

P：会員にくれるんですよ、TIMSとORSAの。

実務家向きの OR Quarterly

S：つぎに歴史が一番古いOR Quarterlyを……

P：昔見ていたんだけどね、コントリビューションしたというよりも、自分でこれだけやったけどよかった、とかいうものが多くて、論文を書くのにはあまり役に立たない。ちょっと僕は最近のことは知らないけど。

R：ケース・オリエンテッドな論文が多いですね。

S：ケースと理論とを1冊の中にセクションに分けてのせてます。実際的ということは、編集方針にははっきり書いてあります。主としてpractioners of OR向けで、ORの発展がわかるようなgood practical case studiesを出すことを勧めると言っている。去年のIFORSのパーティーでKinard 女史と話す機会があったが、too mathematical, too theoreticalなものは受理しないということです。

S：僕はORの授業で、論文を2、3コピーして課題を与えてレポートを書かせますが、そこで使うのはたいていORQです。たまにMS、簡単にLPやマルコフ連鎖を話しておくだけで読ませられるものもあるから。

R：問題になっているところを知るにはいいですね。

Q：私は全然読んでなくて……。

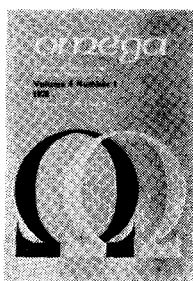
S：そう、あなた向きではない。

R：ORQのBook Selectionのページ、InterfacesのBook Reviewはいいですね、くわしい書評で。

S：外国の人の書評はかならずしもほめないで正直に書くからいいですよ。参考になる。ひとつの本についてORQとInterfacesの両方に出て、見方が違ったりして。

R：雑誌の巻末に周辺の雑誌の目次がよくのりますね。あれは便利です。

S：広告ですね。日本でも、本誌と「数理科学」と広告



の交換をはじめました。6月号から。

新しい経営科学誌 *OMEGA*

S : *ORQ*に続いて、性格の似ている *OMEGA* を、本当に驚くことは、Samuel Eilon 編集長が毎号冒頭に論説を書くことです。むずかしいけどおもしろ

い、その反響がそのつぎのページにある feedback につぎの号あたりからどんどん投書されてきてのる。たとえば *ORQ* にだれかが *OR* の社会的責任について論じたら、Eilon がそれから論説を書き、それへの討論が feedback のページにと、……。

P : どういうねらいの雑誌ですか。応用したなんてのはないんでしょ。問題のありかたを議論するんですか。

S : いや応用からのが多いし、いろいろある。

R : うんと大きなやつね。

S : 問題点を列挙して概念をきちんと整理するということをやった論文もある。たとえば病院の看護婦の要員計画についてのものがあつた。年間、月間の雇用計画と毎日のシフトのマネジメントの計画の3段階でどういう情報が要り、どういう要因が互いにかみ合い、そのシステムのマネジメントの評価をどうするか、ということを整理してあつた。看護婦の要員計画システムの設計書の第1段階のようなものです。設計もしているらしいが、ここには入ってない。学生にも読ませました。

R : 大きなことが書いてあって、くわしくは参考文献へというようだ。

P : 大きなことって何ですか。たとえば理論的なことですか、コンセプチュアルなことですか。

S : シミュレーションをやると、何のためにしたかとか、どういうものを変数にしたか、コントロールにとつたか、その結果をどう利用するかとか。

P : 1つ1つ問題を解析するためにどういうことを考えなくてはいいかを中心に議論しているんですか。

R : 解析はあんまりないですね。

P : たとえばどういう要素を取り上げなければならないとか、評価基準は何にするかとかですか。

S : 編集方針では、original contribution から総合報告まで。それから、手法の批判的な展望をのせると言ってます。たとえば最近では Geoffrion の整数計画法の総合報告があります。数式はほとんど使っていない。

P : 研究の概念的なもの？

S : 論文は多いけど、実用的には2、3を除いて進歩は見られないとハッキリ批判している。割にばからしい論

文もあるところは、まだ4年目で寄稿者の持つ性格もまだ固定していないためかもしれない。

P : 編集長はプロブレム・オリエンテッドなんですね。Churchman も editor に入っているくらいだから。

S : この2冊は大学の図書館で取っていたら、おもしろいことに、個人専用は半額以下です。*ORQ* は45ドルを25ドルに、*OMEGA* は85ドルを25ドルにするんですよ。

ロジスティックスの雑誌 *NRLQ*

S : *Naval Research Logistic Quarterly* (*NRLQ*) はロジスティックス関係の論文をのせると言っても、結局 *OR* 全般にわたりますね。

P : だけど狭い *OR* ですね。システムというのは出てこない。小さい問題です。

S : 探索、ゲーム、生産、在庫、スケジュールとか。

Q : スケジュールと言っても小さいのね。

P : *ONR* からの援助の研究の論文が比較的多い。昔とっていたんですよ。安かったから、1,000円しなかった。

Q : これは独特の活字ですね。サイズが大きいし、日本の規格とちがうからコピーがとりにくい。

独、仏、加の学会誌

S : *Zeitschrift für OR* は(1971年での) *Unternehmensforschung* と言ったころ、ドイツ語の勉強にとと思ってとりはじめたんですが、英語の論文がどんどんふえたのと、大学で買いはじめたのでやめてしまった。しかし最近ドイツでも *OR* が盛んになって、またほとんどがドイツ語の論文になってきた。

R : フランスの *Revue*……は合併したんでしたね学会が、*OR* と情報理論とかが。カナダは *OR* と情報処理と2つの学会が共同で出している。

P : フランスのは僕は Abadie の論文しか見てない。*CORSJ* (*INFOR* の1969年までの誌名) はレベルが低かったですね。

S : いやこのごろはそうではない。*MS* がカナダの経営科学の特集の別冊を出したが、かなり実施のレベルは高い。アメリカの大学を出た人がどんどんいっている。

Q : フランス語で書かれると日本では読む人が少ないでしょうね。

S : 最近ドイツ語で書かれた教科書をよく見るし、Dantzig の *LP* の大冊の独訳までだいぶ前からある。

R : フランスもあまり外国語を使いませんね。

P : フランスのはこの号だけでは性格はわからない。

R : *Revue* は号ごとに内容がちがって、年12冊のうち表紙が緑の3冊が *OR* で、あとは数値計算とか情報とか。

P : これらの雑誌からの引用はあまりありませんね。

S: この他に文献紹介のリストにあるOR学会誌は、*New Zealand OR*, *Opsearch*(インド)とかベルギーですね。

Q: DeGroot の *Optimal Statistical Decision* を見て、何から引用されているかちょっと調べたけど、ORはORとMSですね。あとは統計関係のもの。それと残念なのは日本の学会誌がほとんど引用されてない。Wagner の *Principles of OR* を見てもそうだな。

P: そういう点では日本のORというのはあまり活躍してないんですね。

Q: 日本の人で外国誌に出している人もいる。

S: よそに出すのは、それだけ評価が高くなるという日本国内の風潮にもよるんでしょ。

3冊揃えるのなら〇〇を

S: 編集委員が文献紹介のためにリストしたOR周辺の雑誌は90あまりになるんですよ。

R: ヨーケありますね。これだけあったら見てゆくのは大変だ。

Q: 文献を減らす努力が要りますよね。

R: 1日仕事ですからね、図書館に入ってバックナンバーをちょっと見るのも。

S: だから、抄録誌のような2次文献が要るんですね。

Q: これからあんまり読まないようにして……。

P: あんまりいろんなこと見てたら何もできない。

Q: この中でチラッと見ているのはMSとORQでしょうか。

P: ふだん見てなきゃいけないのはどれとどれでしょうね。理論をやっているとORQを引用するのはめったに出てこない。理論家としてはやっぱりORは入る、引用されることが多いから。それにMS。

S: 実際になるとORQとかOMEGA。

P: 1つだけ推薦せよと言われたら、MSだけを見ておいて、あとはそこでの引用をさぐってよそを見る。

Q: ある先生に3冊揃えておくとしたら、と聞いたら、OR, MS, NRLQだった。

P: やはりご専門の関係ですね。

S: 3冊と言ったら、僕はORを除きますよ。これはどこにでもあるから。MS, ORQ, OMEGA だな。

Q: ORはOR以外の専門の人も借りにぎますよ。

P: 理論をORに、その応用や問題からの論文をMSに出す人がいるから、揃えるなら両方をね。

(次回はORの専門分野ごとの雑誌を取り上げて、10月か11月号に掲載の予定です。)

支部だより

1975年度支部報告

昨年度の事業・会計報告等が各支部から提出され、さる5月21日の理事会で承認されました。そのすべてをご紹介する余裕はありませんので、かいつまんでご紹介します。各支部とも独自の研究・普及活動を活発につづけており、同じ「研究会」といっても若干ニュアンスは異なる

ようですが、下の表では一緒にし、回数だけ記しました。(単位 円)

中部支部の役員名は7月号所載の同支部の支部だよりでお知らせしてありますが、他の支部についても、誌面の都合がつき次第、順次お知らせする予定です。

支部名	事業報告・計画 (上段50年度・下段51年度)						50年度決算		51年度予算	
	講演会	研究会	懇親会	見学会	講習会	支部長	収 入	支 出	交付金 ^(イ)	総 額
北海道	1	1			1	加地 郁夫 (北大)	182,541	121,350	178,000	416,276
	2	3~4	2							
東北	2	4	1			松田 彰 (東北電力)	113,172	101,645	164,000	210,193
	3	4	1							
中部	1	6 ^(イ)	2 ^(ロ)	2		依田 浩 (名工大)	299,286	260,108	358,000	452,008
	2~3	数回 ^(ロ)	3 ^(ニ)	1~2						
関西	12 ^(ロ)					三根 久 (京大)	548,437	613,920	494,000	659,256
	4 ^(ロ)	1 ^(ロ)								
中国・四国	5	2			1	丸山賢三郎 (中国電力)	239,285	228,641	246,000	274,876
	4	6								
九州		8 ^(ロ)	1			三上 採 (九大)	173,369	69,897	140,000	150,000 ^(ロ)
		8 ^(ロ)								

(イ)他に研究発表会(発表12件、特別講演1) (ロ)他に研究発表会1回 (ニ)懇親ハイキング (三)内2回はハイキング
(四)研究講演会(担当主査が定められる) (ロ)支部大会 (ト)4回は九州、4回は福岡 (イ)交付金とは支部の人員に応じて本部より交付される交付金 (ロ)別に前期繰越金512,754